

1 秘境 マイコミ平

青海町役場 渡 辺 紀 一

北アルプスが日本海に落ち込む新潟県西頸城郡青海町に、日本でも有数の石灰岩層がある。この青海石灰岩層は黒姫山（1221.5 m）を中心に長さ8キロ、幅4キロの楕円形の山地で、石灰岩の最大層厚は1000 mを超える。

その生成期は古生代の石炭紀～二畳紀で、今から3億年から2億年前の昔海底に堆積したものであって、その後、中生代のジュラ紀に陸化し、幾度もの地殻変動を経て現在の姿になった。

マイコミ平は黒姫山南尾根と町界尾根に囲まれた約6平方キロの谷間で、ブナの原生林と猛烈なブッシュにおおわれ、神秘的な秘境をなしている。石灰岩地が侵蝕されたスリ鉢状のドリーネと、谷の水が岩の割目に吸い込まれて地下へもぐるいわゆる吸い込みがいくつも無数にある。その全貌はまだわからない。

とくに幾百ともしれない洞窟からつづく地下の世界は未知のままである。この谷間を地元ではマイコミ平と呼んでいるが、マイコミというのは川水が地下に巻き込んでゆくところからの命名である。地下にもぐった水のほとんどは谷の入口の福来口から吐き出されているようである。しかし、それを確認した者はまだいない。

吸 い 込 み

マイコミ平への降水はかつて地表を流れ、田海川に注いでいたと思われる。浄土門のゴルジュがその名残りをとどめている。雨水は岩の割目にしみこみ、永年の間に地下トンネルをつくって流水路を変えてしまった。現在、マイコミ平の流水はすべて地下に吞まれている。雨水は谷を流れ、川となってその大部分は2つの吸い込み——大マイコミ・新マイコミ——から地下に吸い込まれてゆく。小マイコミはいま衰弱してしまった。地元、高畑部落の古老の話に、吸い込みに土砂・流木が詰まり、マイコミ平の広原が一面の湖になったという。

ド リ ー ネ

ドリーネのことを地元ではオハチと呼んでいる。伝説によると黒姫山一帯のオハチは8008釜あるという。マイコミ平には5000もあろうか。滝谷内から牛池谷にかけて特に多い。直径50～60 m級も多くある。なかには200 mにおよぶものがあるという。大きなギンブキ鉢、

穴が2つ並ぶ夫婦鉢、牛が遊泳したという牛池鉢が知られている。

残雪の頃に山上から見渡すと丸いドリーネはよくわかるが、夏はブッシュの緑一色に塗りつぶされていてわからない。

洞 窟

マイコミ平の洞窟数はまだ確認されていない。広大なブッシュ地帯に幾百ともしれず散在している。ここの特色はなんといっても石灰岩層が厚いということである。それだけに洞窟は深い。洞窟はすべて堅穴であってしかも流水を伴っている。黒姫山山頂付近で洞口を見つければ1000mの堅穴もあながち夢とはいえないのである。

青 海 千 里 洞

古くより知られる洞窟として、大穴、小穴、東西姥が懐などがある。小穴は昭和41年関西大学探検部が地下290mの日本記録をつくり、青海千里洞と命名してから有名になった。この洞窟の圧感第1ホール100mもある大雪溪と底部最大径90m・高さ90mもある石灰岩の大殿堂・第Ⅲホールである。昭和43年、関大5度目の挑戦によって全貌を解明された。底部は地下405m地点であった。文字どおり日本一の堅穴洞窟である。

奴 奈 川 洞

大マイコミ岩盤割れ目の土砂を取り除いたところに洞窟があらわれるが、これが奴奈川洞である。昭和42年、青海町役場の5名が30m地点まで試降した。同年8月、名古屋大学山岳部がアタックして、地下200mまで到達したが、さらに次の平坦地までの距離が50～70mあるという。この洞窟は洞口に吸い込みをもつので、磨かれた美しい岩を露出しているが、渇水期の晴天時でないとう入洞は危険である。

「 幻 の 大 横 穴 」

マイコミ平から北へ約4キロ離れて福来口がある。ここは古くから鍾乳洞として知られていて昭和10年8月、秋山徳兼氏をはじめとする地元青年団などによって約400mのサイフォン地点まで解明されている。洞口では大量の伏流水が吐き出されているが、石灰岩層の分布や地形、あるいは他に伏流水の吐出口が確認されていないことからこの水流はマイコミ平からのものと推定されている。

石灰岩洞窟のスケールはそこに流れる水量の多少によって判断されるが、マイコミ平への降水がすべて福来口から吐き出されるとすればこの約4キロの地底世界に大鍾乳洞の存在することが想像される。千里洞をはじめとするマイコミ平の洞窟は石灰岩の性質・洞内の水量・スケールからして堅穴部分に底があるとは考えられない。おそらく地下で、福来口にぬける大横穴へ落ち込んでいるのであろう。マイコミ平（千里洞附近）と福来口の標高差は500～600mであるが千里洞はほぼ垂直に405m切れ落ちている。

仮にここを千里洞堅穴の終点としても、約4キロの距離に100m前後の標高差ということになり、このことは地底にある大横穴の平均傾斜がゆるいことを考えさせる。いまは推測の「幻の大横穴」であるが、その解明は残された最大の課題といえる。

拾 遺

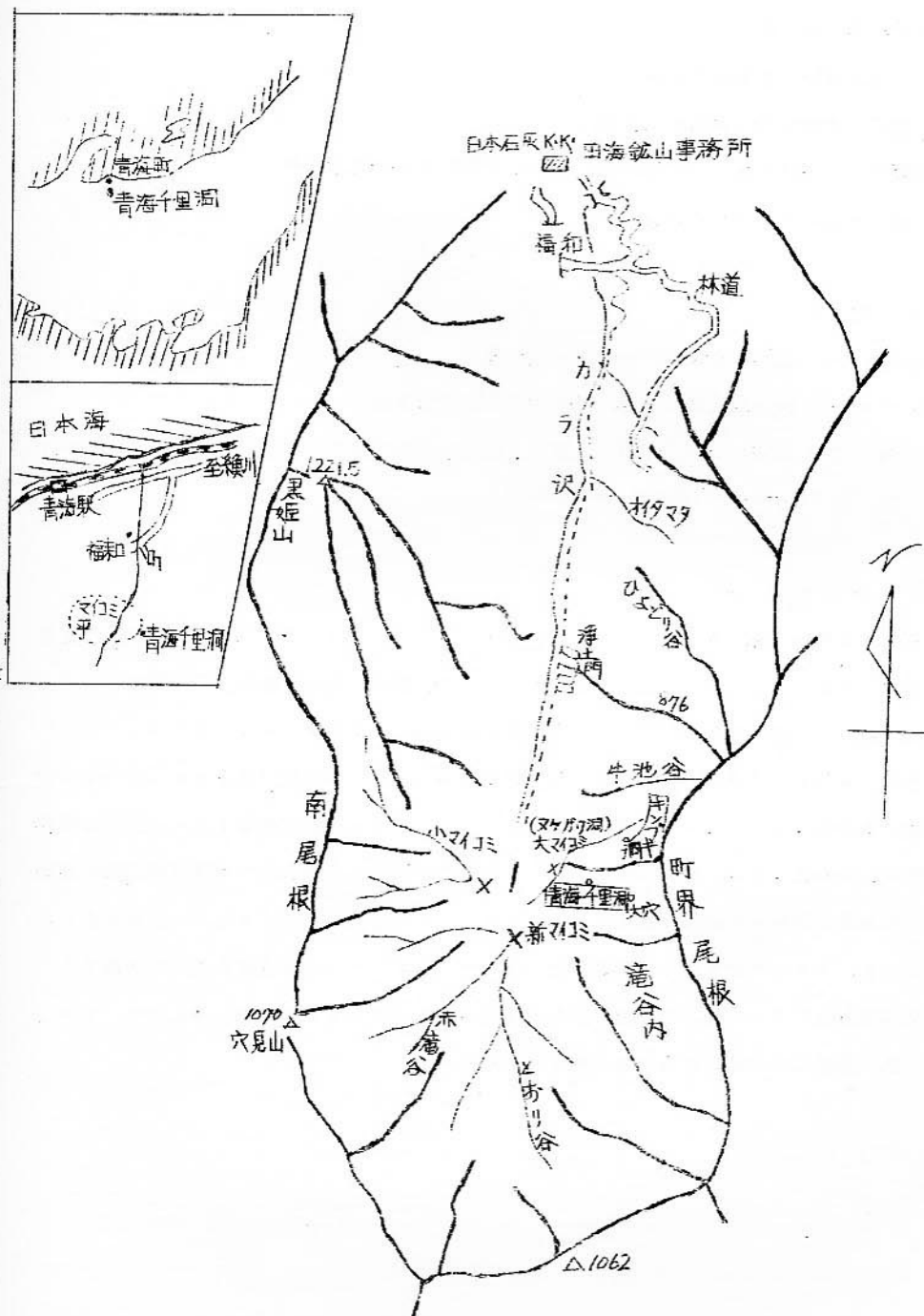
マイコミ平は伝説の世界に初まる。福来口は太古の奴奈川姫の住み家とされ、姫はハタを織って洞内の川でさらしたという。姫が舟遊びしたという舟庭という地名も残っている。ドリーネをめぐる伝説もある。黒姫一帯のドリーネの数を権現は8007釜といい、鬼は8008穴といい大いに争った。再び鬼が数え8007穴に至ったとき権限が1穴さっと隠してしまった。鬼の負けである。くやしき鬼は黒姫山の一角に食いついた。それを「鬼のツラ」と今に伝え、草木の生えないところとしている。争った鬼は蛇で鬼が追われる姫を隠した洞がいまの西姥が懐だという話もある。

マイコミ平へ初めて入ったのは地元の高畑部落の人だろう。いつ炭焼きがはじまったのかははっきりしないが、明治以前の昔らしい。

最盛期の頃は60人もの人でカマがにぎわい大穴のドリーネにも橋をかけ通行したという。オブタマタよりマイコミ平にいたる現在の歩道も当時のふみ跡である。

マイコミ平の吸い込みにモミガラを投入し、三日三晩後に福来口で確認したという話が地元に残されている。いたく興味をひかれ、いつ頃だれがやったのか調べてみた。青海川でもモミガラを確認したという人がいた。黒姫山をもぐり大沢部落に流れているというのである。勝山で確認したという話も聞いた。親不知でもモミガラが出たという人もいる。地下水はついに日本海まで来たのである。これは大変なことになったと思い、聞き込みにビッチをあげたが、どの人も最後にいう言葉は「そういう話を聞いているがさて、だれがやったものやら」である。

モミを投入したのは事実だと思いたいが、そうとすれば資料の残っていないのが、かえすがえす残念に思える。



マイコミ平周辺図

3) 写真撮影

4) より正確なる測量図の作製

5) 洞内の生物学的・地質学的調査

Ⅱ 銀蔭洞（ギンブキ洞）の次期調査にそなえてのアタック及び調査

Ⅲ 人間の能力の可能性への追求

－ 方法 －

洞内流水量の最も少ない時に於ける短期決戦

1) アタック 隊と調査隊の2隊に分けて同時に活動する。

2) 洞口より第4ホールまでの写真撮影、測図、生物学的及び地質学的調査は調査隊が行う。第Vホール以下はアタック隊が行う。

－ アタック方法 －

最深部アタック隊は7名で、洞内キャンプ3泊4日を行なう。アタックの成功の鍵は気象状況と隊員のコンディションにかかっているため、隊員の英気を養い、天候の動きをじっくり見つめ、最良と思われる日に一気に攻め落とす。いわばラッシュタック方式をとる。3泊4日の予定は第1日目入洞、第3ホールにA・C設営、第4ホールにハシゴ設置。2日目、3日目、-370m以下をアタック。アタック終了後第4ホール以下の装備撤収。4日目、A・C撤収出洞。7名のうち1名がアタック隊の動きを常時調査隊に連絡。3名が第5ホールで確保連絡係、残りの3名が-370m以下のアタック。堅穴がなおもつづき、アタックが7名では困難になった場合、第3ホールの調査隊がこれに加担する。又調査隊はアタック隊との連絡可能な第2ホールに達するまで2時間かかるので、アタック隊は毎朝この時間を遅らせて活動するようにする。